

幸せを運ぶ鳥コウノトリのイメージの崩壊

兵庫県立大学自然環境・科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園地域資源管理研究所 大 迫 義 人

Collapse of good images of the Oriental White Stork that brings happiness for humans. Yoshito Ohsako (*Institute of Natural and Environmental Sciences, University of Hyogo/Regional Resource Management Institute, Prefectural Park of Oriental White Stork, Hyogo*)

コウノトリは、幸せを運ぶ鳥として多くの人々に親しまれている。コウノトリを見ると良縁に恵まれるとか、赤ちゃんを運んでくれるとか、また、その姿形からおめでたいツル（タンチョウ）と混同されたりする。

人との共生を目指して、このコウノトリをかつての生息地に再導入させる取り組みが、兵庫県但馬地方で2005年に開始されて早5年がすぎた。この間に、野外のコウノトリは、今まで私たちが知らなかった生態や行動を見せてくれた。その中には、やはり幸せを運ぶ鳥だと思わせることもあったが、一方で、科学的には説明できるが、市民感覚では承認しがたい行動も数多く観察されるようになった。これらの行動は、コウノトリの持つ良いイメージを覆すに足りるものであった。

まずは、幸せにまつわるコウノトリの逸話や生態を紹介する。

瑞鳥

めでたい前兆を瑞兆という。明治時代、兵庫県但馬地方のコウノトリは日本に瑞兆をもたらした。1894年（明治27年）、日清戦争の開戦時に、豊岡市出石町の通称“鶴山”に一つがいのコウノトリが飛来・営巣し雛を育てたところ、日本が戦争に

勝利した。その後、営巣が途絶えたものの、10年後の1904年（明治37年）、今度は日露戦争の開戦にあたり、再びコウノトリが飛来・繁殖し、またもや日本への勝利をもたらした。これらをきっかけに、コウノトリは瑞兆をもたらすめでたい鳥、すなわち瑞鳥として、日本中に「瑞鳥ブーム」がまきおこったと言われている（菊地・池田、2006）。

「松上の鶴」はコウノトリ

立派な松の木に鶴（タンチョウ）が止まった「松上の鶴」は、掛け軸の中でも有名なデザインのひとつである。しかし、これは鳥類学的にはあり得ない構図である。タンチョウを長年、調査してきた研究者にも確認したのだが、一度も、タンチョウが木に止まるところを見たことがないとの事だった。では、この鶴は何か？大型で、頸と脚が長く、白黒の端整な姿であるタンチョウによく似ているものの、実はコウノトリである。

タンチョウはツル目の鳥であるが、コウノトリは、サギ類やヘラサギ・トキなども分類されるコウノトリ目の鳥類で、樹上に止まって営巣する種である（Hancock et al., 1992）。タンチョウとは分類学的には遠い関係にあるのだが、コウノトリは、外見が似ているために古人たちは間違っ

しまったようだ。事実、日本で最後まで野生下でコウノトリが生息していた兵庫県但馬地方では、人々はコウノトリのことをツルと呼んでいた。鳥類学的には間違っているが、コウノトリがおめでたい鳥と見なされていたことは事実であろう（菊地・池田，2006）。

赤ちゃんを運ぶ

「コウノトリ」でインターネットを検索すると、兵庫県立コウノトリの郷公園がヒットするのは当然だが、中に、結婚相談所や子宝に恵まれない人々のグループも出てくる。つまり、日本人にとって、赤ちゃんはコウノトリが運んでくるというというイメージが一般的になっているのである。しかし、この話は、ヨーロッパに生息する嘴の赤いシュバシコウにまつわる迷信であり、女神（ホレ）の使者としてシュバシコウが“命の精”を沼から民家に運んだ伝説によるものと言われている。

一方、日本のコウノトリは、シュバシコウと違って嘴の黒い別種であり、古来、白くて大きい鳥であるため“おほとり”とかタンチョウに似ているため“かうづる”とか言われ（菅原・柿澤，2005）、神々しい鳥とみなされてきた。つまり日本には、コウノトリと赤ちゃんを結びつける伝説は、本来、なかったのである。近年の西洋文化の浸透により、日本人誰しもが、赤ちゃんはコウノトリが運ぶと連想するようになったのである。

大安の日に巣立つ

2007年、コウノトリの日本の野生下での復活において46年ぶりの快挙となる、1羽の雛が巣立った。この時、誰からか「今日は大安だぞ」という声が聞こえた。そんな偶然もあるだろうと、私は気にはしなかったのだが、その後も、なぜか大安

の日にコウノトリの雛が巣立つことが目立つようになった。そこで、2010年までに巣立った日を集計したところ、計27羽のうち13羽（48.1%）が大安の日に巣立っていたのである。大安の日は、年間で約61日（16.7%）しかないのに、この日に巣立つ確率はそれよりも高く、そして統計的にも有意であった。

“ツバメは大安の日に巣立つ”という、根拠のない言い伝えがあるが、まさかコウノトリにおいて、このような現象が実際に起こるとは誰も予想していなかった。大安は、六曜による暦注で決められた日であり、そこには何ら生物学的根拠はない。にもかかわらず、多くの雛は大安の日に巣立った。これは幸せを運ぶコウノトリならではの現象と思うしかない。

人を呼ぶ

2005年9月23日、約3,500人もの人々が見守る中、5羽のコウノトリが放鳥された。力強く、空に羽ばたいてゆくコウノトリに人々からワーという大きな歓声がわき起こった。中には感極まって

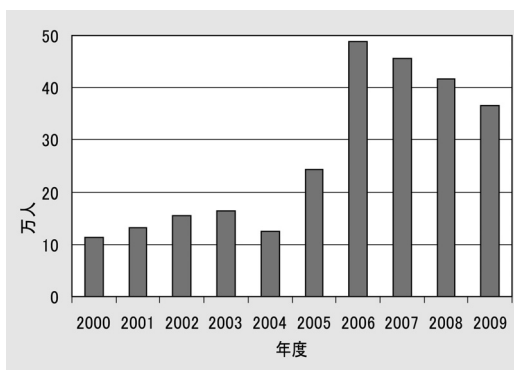


図1. 兵庫県立コウノトリの郷公園内の豊岡市立コウノトリ文化館での入館者数の経年変化。2005年からコウノトリの野生復帰が開始された。

泣き出す観客もいた。コウノトリは、それだけ人々を魅了する鳥だった。

この最初の放鳥をきっかけに、コウノトリの郷公園に来園する人が増加した（図1）。特別天然記念物であるコウノトリとその保護活動を勉強する、というよりも観光目的で来る人が多いのだが、それでも、人々がコウノトリを見たいと集まることは地元の観光の活性化に役立っている。

安全・安心なコウノトリ育む農法

コウノトリは、田園生態系のキーストン種であり、その生物多様性が高くなくとも生存できない鳥類である。採餌環境として最も重要な田圃の生き物を復活させるために、兵庫県や豊岡市は、「コウノトリ育む農法」を推進している。

これは、化学農薬を減らし有機肥料を使い、また水生動物のために中干しを延期したり魚道や避難場所を設置したりして、多くの生物が棲めるように配慮する農法である（コウノトリ野生復帰推進連絡協議会、2007）。その結果、この農法で栽

培された「コウノトリ育むお米」（図2）は安心・安全な食べ物として、4～8割高い値段にも拘わらず、コウノトリの持つ良いイメージと相俟って好調な売れ行きを見せている。

以上、コウノトリは、勝利の鳥、めでたい鳥、繁栄の鳥、安心・安全の鳥である、という良いイメージの話である。一般の人たちにとっては、コウノトリは歓迎される鳥である。ところが、である。放鳥されたコウノトリが野外で見せる生態や行動は、そのイメージを崩すものが多かった。

何でも食べる

コウノトリの主要な餌は、魚類、両生類、甲殻類、昆虫類である。魚食の鳥として、ウ類、カイツブリ類、サギ類など多くの種がいるので、これだけでは悪いイメージではない。

しかし、大陸から飛来した野生のコウノトリが、糸を引くほど腐った魚を平気で食べるのを見た時は、当たって死ぬのではないかと心配した。コウノトリの仲間に腐肉食のハゲコウがいるので、コウノトリもそんな食性があっても不思議ではないが、何もそこまで食べなくてもと思えた。さらに、放鳥された、飼育下で育ったコウノトリも、それまで餌として知られていなかった、マムシを含むヘビ類、小さいサイズのカメ類、嘴より大きい大型のウシガエルをも丸呑みしたのである。サギ類に比べて採餌効率が悪いコウノトリは、動物であれば腐っていようとかわまず、また、小型の鳥類や哺乳類も捕獲できれば何でも食べてしまうのである。その白黒の端整な姿からは、悪食のコウノトリは想像しにくい。



図2. コウノトリ育むお米.

一夫一妻？

コウノトリの引き合いに出されるタンチョウは、ほとんどの場合、一度、ペアになると一生をその組み合わせですごす。コウノトリの場合も、繁殖は1オスと1メスで行うので、一夫一妻である。

2008年のことである。前年にペアとなって営巣したメスが、その相手と違うオスと行動を共にしていた。繁殖の失敗が原因でペアの相手を変えることは、他の鳥類でも知られていたもので、あり得ることと考えられた。しかし、その後、このメスは前年のペア相手のオスと新しいオスの、それぞれの巣を行ったり来たりして、二転三転、相手を変えたのである。コウノトリは、生涯、一夫一妻をとおす忠実な鳥であると思っていた市民からは、このメスの行動に対し驚きと落胆の声が上がった。

他人の子を育ててしまった

2008年、このメスは、最終的には、前年の相手と繁殖し1羽の雛を育てあげた。ところが、である。研究室でのDNAによる父性判定の結果、巣立った雛の遺伝的親は、育てたオスではなくもう1羽のオスであることがわかった（内藤ほか、2010）。他の鳥類でも育ての親が実の親でない事例は知られており、メスにとっては自分の子の遺伝的多様性を高める上で有利であると考えられている。しかし、コウノトリでも同じ事が起こると、市民はもちろん、鳥類学を専門にしている私でも複雑な気持ちになった。科学技術の進歩は、時として、人々の純粋な思いを打ち砕いてしまうものである。

メス—メスペアの成立？

2010年のことである。それまでに、姉—妹よろ

しく、一緒に連れ立って生活していた2羽のメスが、ひとつの巣に留まるようになった。巣の材料を運び、巣に伏せるようになったのである。この行動は、通常、産卵した時に観察される。確認のために巣内を観察したところ、果たして卵が存在したのである。もちろん、卵は孵化しなかったが、メス同士で産卵・抱卵することは、飼育下でも知られていなかったもので、驚きであった。

ただし、このメス—メスペアでの営巣は、鳥類学的にはあり得る行動である。カモメの仲間でメス—メスペアで産卵し雛を育てることが知られていた（Hunt & Hunt, 1977）。科学的には想定されても、コウノトリのペアはオスとメスだと思っていた市民には、啞然とする現象であった。

餌をめぐるペア喧嘩

2009年、野外のひとつの巣を熱心に観察していた市民から、コウノトリのペアが巣で大喧嘩をしているとの連絡が入った。巣を守っていたオスが帰ってきたメスを攻撃したのである。ペア間のことだから、明日には収まると誰しもが予想し、実際、その通りになったのであるが、その後も何回か喧嘩が観察された（図3）。



図3. 餌を独り占めしたメスに攻撃するオス（撮影：北垣和一）。

他のペアでは観察されないのに、なぜこのペアだけが？と考えているうちに、はたと気付いた。ペア喧嘩が起こった日は、オスが卵や雛を抱いて巣を離れられない状況で、メスのみが給餌の餌を独り占めして戻ってきた日だったのである。まさしくペア喧嘩ではあるが、その理由が餌であったとは、呆れてしまった。

隣の巣を襲撃する

2009年の繁殖期、あるペアが隣のペアの巣に飛来して、いきなりその中にいる雛に攻撃を加えた。この時は、雛もその成鳥に刃向かい大事にはいらなかったが、9日後の2回目の襲撃で、1羽の雛が傷を負い死亡してしまった。

動物の世界では、同種の子どもを傷つけたり殺したりすることが多くの種で知られている。鳥類でもサギ類、ヒメアマツバメ、ツバメ、カルガモなどで観察されている。理由としては、繁殖のための、配偶者の乗っ取りやなわばりの確保であると考えられている(Shimada et al., 2002)。確かに、襲撃したペアは繁殖に失敗していたので、次の繁殖のためなわばりを拡大しようとして凶行に及んだと考えられた。しかし、同じ仲間のコウノトリが、しかも雛を襲い傷つけるとは、多くの

市民にとってはショッキングな出来事となった。

死んだ雛を食べる

同じく2009年の繁殖期、市民から、ある親鳥が、頭と脚があるものを飲み込んだと連絡があった。撮影された写真を拡大すると、死んだ雛を親鳥が食べたことがわかった。それまで、死んだ雛を巣外に捨てる行動は観察されていたが、その雛を親が食べるとは、誰しもが目を疑った。

この行動は、猛禽類ではよく知られており、自分が産んだ卵や死んだ雛を食べることは、親からみれば投資した資源を回収するわけで、生物学的に言えば理にかなっている。しかし、死んでいたとはいえ、親鳥が自分の雛を食べることは、私たち人間からすると信じがたい行動であった。

生きた雛を捨てる

死んだ雛を食べることは、ある意味、仕方ないとは思えるのだが、2010年には、今度は、雛はまだ生きているのに親鳥がその雛を巣から捨て去る瞬間が市民によって撮影された。1羽目は、親鳥が、うごめく雛を嘴でくわえ上げて飲み込むような仕草すら見せた。その雛は、その後、行方が不



図4. 生きたまま雛をくわえ上げ捨て去った親鳥(撮影: 沢田賢一)。

明となった。2羽目は、親鳥が嘴でくわえ上げそのまま雛を巣から落としてしまった(図4)。その雛は、我々によって回収されたので死亡が確認された。

自分の雛を捨て去る行動は、ヨーロッパのシュバシコウでも観察例があるらしいが、なぜそんな無惨なことをするのか、市民だけでなく私も理解に苦しんでいる。

コウノトリとの共生を続けるためには

放鳥から5年経ち、野外で自由に生活するようになったコウノトリは、良いも悪いも、それまで知られていなかった行動を見せてきた。私たちにとっては、まさに毎日が驚きの連続である。

コウノトリの示す行動は、科学的には適応的と考えられても、一般市民にとっては、とても理解し難いことが多かった。しかし、明日には死ぬかもしれない野生動物にとって、生存や繁殖のために最善の行動をとることは、十分考えられる。私たちの価値観や倫理観からすると信じがたい行動であっても、コウノトリという種が持っている社会であることは間違いない。だとすれば、私たちは、これからも彼らの自然な生態・行動として、共生するためには彼らの良き理解者として見守ってゆくしかないであろう。

この報告をまとめるにあたり、北垣和一氏と沢田賢一氏には、貴重な写真を提供していただいた。ここに感謝する。

引用文献

- Hancock, J. A., J. A. Kushlan & M. P. Kahl. 1992. Storks, ibises and spoonbills of the world. 385pp. Academic Press, London.
- Hunt, G. L., Jr. & M. W. Hunt. 1977. Female-female pairing in Western Gulls (*Larus occidentalis*) in southern California. Science, 196: 1466-1467.
- 菊地直樹・池田 啓. 2006. 但馬のコウノトリ. シリーズ但馬V. 304pp. 但馬文化協会, 豊岡.
- コウノトリ野生復帰推進連絡協議会(編). 2007. コウノトリ野生復帰推進事業・活動一覧ーコウノトリと共生する地域づくりをめざして. 101 pp. コウノトリ野生復帰推進連絡協議会, 豊岡.
- 内藤和明・大迫義人・西海 功. 2010. 野外で巣立ちしたコウノトリの父性解析. 「第57回日本生態学会講演要旨集」, pp. 450. 日本生態学会, 東京.
- Shimada, T., K. Kuwabara, S. Yamakoshi & T. Shichi. 2002. A case of infanticide in the Spot-billed Duck in circumstances of high breeding density. J. Ethology, 20: 87-88.
- 菅原 浩・柿澤亮三(編著). 2005. 鳥名の由来辞典. 622pp. 柏書房, 東京.
- 注) この報告は、2010年11月21日、大阪市立自然史博物館で開催された大阪バードフェスティバル2010の市民向け講演会で発表したものである。